

日本海学のすすめ

富山県生活環境部長 * 中井徳太郎 NAKAI Tokutaro

1. 問題の所在

世界の科学者や経済学者などで組織するローマクラブが、「成長の限界」と題する報告を公表してからすでに約30年が経とうとしている。「現在の人口、汚染、工業化、食料生産、資源消費の傾向がこのまま続けば、100年以内に地球は成長の限界に達して、人口や工業生産の制御不能な崩壊が起きる」と地球の将来を予測し、これを回避するには「人口、生態系、経済を安定させて地球的な均衡をつくりあげ、持続可能な社会をつくるしかない」という、成長の抑制を結論づけている。

21世紀に入った今日、残念ながらローマクラブの予測はほぼ的を射ていたことが証明され、現在、人類活動にともなう地球へのさまざまな負荷の幾何級数的な増大が現実のものとなっている。そして、世界の人口の約半分を占めるアジアがまさに火薬庫であることを認識しなければならない。

現在見直しを迫られているのは、特に産業革命以降顕著になった資源浪費型ともいえる自然との対決型の工業化パラダイムである。産業革命以降、いわば西洋近代のパラダイムの下で工業化を進め、米国フォードの大量生産方式を代表とする、大量に資源を浪費する形の人間の営みが地球を覆い尽くすにいたった。人口が爆発的に増加し、その人口が農村を捨て都市圏に集中する形での一極集中が顕著になり、さまざまな問題を引き起こしている。化石燃料の枯渇、森林の破壊と砂漠化の進行など、地球環境の破壊の問題が非常に深刻になり、国境を越えた海洋汚染、大気汚染に加え、地球温暖化や環境ホルモンの問題が発生し、地球における人間を含めた生物の生存可能性自体の危機が顕著になっているのである。そして、この危機は世界の人口の約半分を占めるアジアにおいて最も深刻なのである。21世紀の火薬庫といわれるアジアに暮らす我々にとって、この問題にどう対処すべきか。

2. 逆さ地図からの発想

富山県が6年前に作成したいわゆる「逆さ地図」というものがある。これによれば日本海が琵琶湖のような湖に見える。狭い対馬海峡、宗谷海峡、間宮海峡により半分閉ざされた海を巡って、日本列島、大陸、朝鮮半島が一体的なものに見える。ここから日本が大陸から切り離された島国だという見方ではなく、地球において北東アジア、海を挟んだ環日本海という圏域に属するという視覚的にイメージすることが可能となる。

地球規模で生じている現在の危機に我々が対処していくには、とかく日本だけは特別であり、世界の動きとは無関係であるという発想に陥りがちな従来の島国日本という見方を変え、日本は、地球という球体において、日本海を取り囲んだ環日本海地域、北東アジアという領域に位置しているという認識が極めて大事となろう

3. 日本海学とは

「日本海学」は、逆さ地図が提供する柔軟な発想に支えられて、環日本海交流の中央拠点づくりを推進する富山の地で産声をあげた。

「日本海学」とは、環日本海地域全体を、日本海を共有する1つのまとまりのある圏域としてとらえ、日本海に視座をおいて、過去、現在、未来にわたる環日本海地域の人間と自然のかかわり、地域間の人間と人間とのかかわりを、「循環」と「共生」と「海」の視点を明確にしつつ、総合学として学際的に研究しようとするものである。

具体的には「環日本海の自然環境」、「環日本海地域の交流」、「環日本海の文化」、「環日本海の危機と共生」という相互に関連した4つの分野からなる。

4. 日本海学が浮き彫りにしつつある課題

－環日本海に視点を置く必要性－

日本海学が提起している「循環」と「共生」そして「海」の視点に基づいて、環日本海地域が抱える地球規模の課題の本質と対処の方向の解明を目指したい。ここでは、次の3点を例として挙げてみたい。

(1) 地球温暖化

地球温暖化については、IPCCが今後100年で最高5.8度の気温上昇がありうるとの報告を出しているが、日本にとって地球温暖化はどのような意味を持つのか。これを解明するには、地球システムの中での環日本海、北東アジアという視点でのアプローチが必須となる。北東アジア、環日本海の大気循環システムを極めて大雑把に地球をやかんにたとえて説明する方法がある。赤道がいわばコンロに暖められるやかんの底であり、北極の極気団がやかんのふたにあたる。水が沸騰するとやかんの蓋が振動するように、北極の極気団も振動している。これが最近注目されている北極振動という現象で、冬には北極の冷気が大陸をわたって日本の方向にもたらされる。ここで特徴的なのは、零下50度程度の極気流が、対馬暖流で温かい日本海によって零下3度程度までに暖められ、その過程で吸収した水分が雪となって日本海側の各地にもたらされるわけである。春に徐々に融けていく積雪のいわゆる貯水機能によって、日本海側のみならず、利根川水系をはじめとした太平洋側の水が支えられている。温暖化は雪をもたらしえば日本海にささえられた気象システムにいかなる影響をもたらすのか。現在すでに日本海側の降雪量の減少が顕著であるが、温暖化によって仮に雪が降らなくなったら、日本の水供給システムが崩れることに思いを致す必要がある。

また、温暖化によって海面が数メートル規模で今後上昇する可能性がある。縄文海進と呼ばれる縄文時代の温暖化局面では海面が現在より数十メートル上昇していたのである。山間部から平野部に移り住んでいる現在の人間の生活のあり方は今後維持できるかどうかが問われようとしている。

このような観点に基づき、ダイレクトに環日本海、北東アジアに着目した温暖化の研究は十分なされているとは言い難い。地球の危機が叫ばれる中で、我々のお膝元である環日本海、北東アジアに何が起きるかを追求する視点が求められているといえよう。

(2) 海洋研究

最近日本海についての研究は徐々に深まってきつつあるが、日本海の研究を進めることが、大ベルトコンベアと呼ばれる世界の大洋循環を解明するために欠かせないとの指摘がなされている。とかく研究者の関心はこれまで太平洋側に向きがちであり、日本海側に海洋研究に関する国家レベルの拠点は置かれていないのが現状である。しかしながら、日本海のような閉鎖性海域における、100年から300年といわれる深層水の循環メカニズム、そしてそこにおける海洋汚染の問題を明らかにできれば、現在まだまだ解明が進んでいない地球規模の海水の大循環メカニズム、またそこで起きる汚染の問題を類推できるのである。日本海に目を向けることがいかに重要であることを示す一例といえよう。

(3) 環日本海の文化

環日本海、北東アジアを文化面から捉えるとどうであろうか。まず、環日本海、北東アジアは、森林と豊かな自然環境が残っている地域であるとの指摘がある。これに対して、現在の市場経済を支えている西欧近代、産業化の歴史は、ある意味で環境と自然を破壊してきた歴史、つまり森を切り倒してきた歴史といえる。その基本にあるヒューマニズムとは、実は人間中心主義であって、つきつめれば人の命は何よりも尊く、他の生物の命はどうでもいいということになる。またこの人間中心主義は、西欧の場合は、ユダヤ教、キリスト教という一神教と結びついている。一神教のもとで、自然を征服する、自然というものを人間がコントロールしていくのだという発想で近代文明は展開してきたのであり、その結果、「成長の限界」という状況に立ち至っているのである。したがって、そういう西欧近代のヒューマニズム、あるいは人間中心主義というものを見直していかなければならない時代に入っているのである。

森が太古の昔から残っている環日本海は、森の文明というべきものを主張しうる地域ではないか。即ち、自然との関係において、一神教的ないわば神と一対一で対峙した人間が自然を克服していく、地球を開拓していくというのではなく、むしろ自然を畏怖する、自然そのものが神であるといった自然観を太古の昔から備えてきた。そしていわば多神教的に、いろいろなものを受け入れる柔構造の精神構造を我々にもたらしてきた地域といえる。実はこの地域は、アイヌをはじめとして、極東ロシアのアムール川流域や中国雲南省

などに多くの少数民族がいるのであり、少数民族の宝庫と呼べる地域なのである。これらの自然を神として畏怖する自然観を共通とする少数民族が、森においてすみわけをしてきたのが環日本海、北東アジアという見方が可能なのである。21世紀の地球で文明の衝突を回避し、民族間の平和の実現を可能にするための新たなパラダイムのヒントが環日本海の民族の文化には存在しているのである。

5. 新たなパラダイムの創造に向けて

日本海学は、循環・共生・海の3つの視点を明確に打ち出しつつ、総合学として幅広くいろいろな角度から学際的に問題を考えようということを提唱している。それは、現在の地球が抱える問題の根元が、陸の論理が優先した産業革命以降の工業化を中心とした人間の営みそのものにより、地球の存在可能性、生物の生存可能性に危機を生じさせているということである以上、いかに人間の営みのパラダイムを循環と共生そして海の視点に立って変えることができるかが問題なのである。行政の方も縦割りの問題があり、学問分野も細分化されていく方向にあるが、いわば人間の営みの総体を、自然、人文、社会科学の観点から学際的に捉え直して、地球と共生できる新しい営みをつくれるのか、ということが今まさに求められている。日本海学はそのフレームワークを提示するものである。

そして、日本海学が森と歴史的遺産が現存する環日本海から創出することをめざす21世紀の新たなパラダイムとは、直線的に発展するという文明観から循環的文明観へ、国家中心の考え方から地域中心の考え方へ、人口の一極集中から地域分散・すみ分けへの転換、そして森の文明の創造と共生の価値観の創出を図ることを可能とするものであろう。

すなわち、日本海学を行政、学術、民間などさまざまな立場から推進し、それぞれの自治体が環日本海、北東アジアという枠組みにおいて、地域のアイデンティティーの確立を図ることによってこそ、これまでの東京中心の流れに対し、真の地方集権によるパラダイムの転換が可能になると考えている。そのために、知見を有する多くの機関と連携しながら、人類共通の普遍的な課題に対して、解決の方向を見出すという基本的な考え方により、日本海学の具体化を進めていきたいと考えている。

平成13年3月31日に富山市で、同年12月22日には大阪市で「日本海学シンポジウム」が開催された。また、同年3月に、シリーズ日本海学『日本海学の新世紀』創刊号が発刊された。

このように、「日本海学」は、21世紀の新たなパラダイムの創出に向けて着実にその一歩を踏み出したところである。

折しも、平成13年7月12日に富山市内で開催された北東アジア地域自治体連合一般交流分科委員会において、地球志向の地域学である「日本海学」が紹介され、北東アジア地域全体を研究する「日本海学」を支援する方向で合意された。今後、日本国内のみならず北東アジア地域での「日本海学」の進展が期待されるところである。

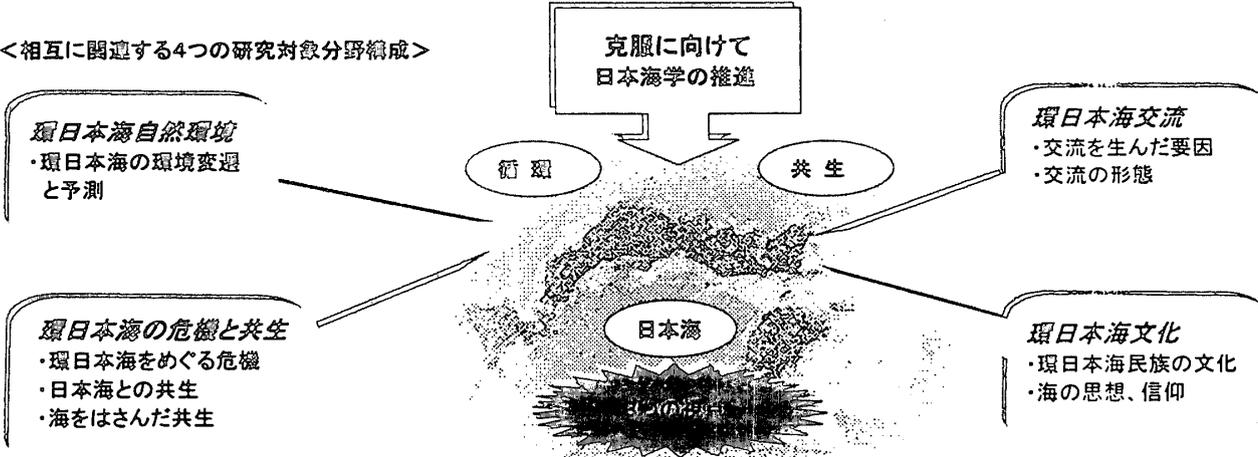
日本海学の提唱

<日本海学の目指すもの>
 日本海学は、環日本海地域及び日本海を一つの循環・共生体系としてとらえて、地域・地球の自然環境と人間とのかかわり、地域間の人間と人間とのかかわりの歴史の中で繰り返されてきた循環・共生システムに学んでいく。そして、将来において起こりうるさまざまな問題を予測し、これに対処する備えを用意することにより、地域全体の危機を回避し、ひいては健全な地域・地球を子孫に引き継いでいくことをめざすものである。

環日本海地域の危機回避

急激な近代化・工業化、人口の増加及びその一極集中に伴う地球未来最大の脅威

<成長の限界：直線的発展の文明圏の破壊、人類生存にかかわる危機の顕在化>
 枯渇する天然資源 化石燃料の枯渇・森林破壊・砂漠化の進行
 国境を越えた環境破壊 海洋汚染・大気汚染・地球の温暖化
 生態系の崩壊 急増する生物種の絶滅



環日本海から、21世紀の新たなパラダイムの創出
 ～危機の回避、地域のアイデンティティの確立をめざして～

- ・直線的文明圏から循環的文明圏へ
- ・森の文明の創造、共生の価値観へ
- ・国家中心の考え方から地域中心の考え方へ
- ・人口の一極集中から地域分散・すみ分けへ

<日本海学の普及・推進に向けて>

- | | |
|--|---|
| <p>1. 定期刊行物の発刊</p> <ul style="list-style-type: none"> 0号 日本海学の世紀 1号 環日本海の美と文化 2号 循環体系としての環日本海地域 3号 日本海及び環日本海地域の環境変遷と予測 4号 環日本海にみる海の思想 5号 環日本海環境と文化 6号 日本海を介した交流～交流の要因～ 7号 日本海を介した交流～交流の形態～ 8号 日本海の危機と共生～日本海環境の危機と対応～ 9号 日本海の危機と共生～日本海を巡る共生～ 10号 日本海における出会いと融合 11号 日本海のカ～資源・エネルギー～ | <p>2. 教材の制作</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中高生向け副読本 ・ビデオ <p>3. シンポジウム等の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> H12 日本海学シンポジウム(富山市開催) H13 日本海学シンポジウム(大阪市開催) ＊毎年県内または県外で定期的で開催する。 <p>4. 日本海学講座、海洋教室の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ＊現在実施している講座を継続、発展させる。 |
|--|---|

350万分1 環日本海諸国図

富士山中心正距方位図

